



## 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 (11月7日開催)



教職大学院では、「子どもの学習意欲を高める授業とは」というテーマを設定し、「教育実践と省察のコミュニティ」を開催した。午前中のポスター発表に続き、午後からは福井大学大学院准教授の木村 優氏の基調講演と発創デザイン研究室代表の富永 良史氏のワークショップが行われた。自ら課題設定を行い、研究と実践の往還によって課題解決を求められる教職大学院生にとって、極めて有意義な内容であり、今後の成長の糧になることを期待するものである。

### 【プログラム】

9:00~12:00

ポスター発表による研究成果報告と総括

教育学研究科教職実践専攻研究成果：

平成27年度修了予定大学院生

13:00~14:30

基調講演「子どもの学習意欲を高める授業とは」

基調講演テーマ：「子どもの学習意欲を高める授業とは」

…木村 優 福井大学教職大学院 准教授

14:40~16:30

ワークショップ

「計画と即興の間へ意欲を高めるファシリテーション」

…富永 良史 発創デザイン研究室 代表  
福井大学非常勤講師

### ポスターセッション



ポスター発表では、大学院2年生、対象の現職教員一人につき一枚の実践的成果をポスターにまとめ発表した。ポスター発表は、オープンスペースにポスターを掲示し、参加者が自由に回れるようにしたものである。事前にポスター発表の報告文書が配布され、大まかな内容はそこで確認ができる。発表者がポスターの脇に待機しており、質問に答えたり、補足的な情報を提供したりする。補足的な情報を提供する際にパソコンを持参して動画を見せたりするなどの工夫をする発表者もいた。参加者は報告文書を読んで気になる発表者のところを自由に回り、質問をしたり、こうしてはどうかという自分のアイデアを出したりする。成果発表などの全体の場で口頭発表より質問や質問の受け答えがしやすく、様々な意見が出やすいというメリットがある。

准教授 内野 成美

ポスターセッションは、院生にとって自分を取り組んできた実践研究の貴重な発表の場であると同時に、「自分を取り組んできた」と思っていたことは本当に取り組むように取り組んでいたのだろうか」という自省と、参加者との意見交換の中で実践研究をさらに深めるための新たな手掛かりの発見を繰り返す場でもある。今回のポスターセッションは参加して非常に楽しめた。発表内容も手堅く、自分が何を意図して何を狙っているかが明確であり、それを説明する力も発表者が多かったように感じられた。また、自分の興味のある内容と社会のニーズをマッチさせた実践研究も多かった。来年度もまた期待したい。

教科授業実践コース 宮崎 理紗

ポスター発表では、教科や校種を問わず多くの人から質問やアドバイスをいただいた。自分自身が研究してきたことを周知するだけでなく、他の院生の皆さんの研究についても話を聞くことにより、新たな視点で自分の研究を見つめ直すことができた。また、ポスター発表において活発な意見交換ができたことは、実践研究報告書の執筆に向けて大変有意義な機会となった。今回のポスター発表での学びをもち、実のある実践研究報告書になるように励んでいきたいと思う。

子ども理解・特別支援教育実践コース 山本 実来

実践研究のポスター発表だが、自分の興味のある研究に多く時間を割き、質問をすることができた点がとても良かった。今回は「学校現場で実践した上での研究結果」のため、「自分が教師になったらこれは実践しよう」と思いやすかった。一般的な論文のポスター発表と比べ、「技」として研究結果(方法)を多く取り込みやすいと感じた。また、幼稚園や小学校、中学校、特別支援学校と様々な校種の発表があり、その校種特有の子どもの様子や教師の考え方が見られるため、普段考えられないような視点を得ることができ、刺激になった。

学級経営・授業実践開発コース 水谷 綾子

「ポスターセッション」に参加したのは初めてのだったが、自分の実践研究について大まかに構想していたことを「ポスター」として図式化する作業を通して、研究のねらいや実践の経過、今後の課題など、具体的に整理することができた。また、発表内容についていただいた質問に回答しながら、これまでの成果と課題について再認識することができ、今後の取り組みについて貴重な視点を得ることができた。他の発表者からも多くの刺激を受け、今後も教科や校種の枠を超えて省察できる機会を積極的に増やしていくことが必要だと感じた。

教科授業実践コース 全 サラ

ポスター発表に参加し多くの学びがあった。先輩方の研究を拝見することで、どのような視点で実践研究を行うのか、また研究内容のまとめ方や記録の取り方、どの検定表を使って研究成果を見出していたのかを知ることができた。そして、自校種だけでなく、様々な校種の実践研究と触れることで同じ視点でも成長過程にあったアプローチの仕方があることも学び、さらに研究に対する視野を広げる機会になった。これからの実践研究に生かしていきたいと思う。

学級経営・授業実践開発コース 行成 功志

ポスターセッションは複数ある研究の中から自分の興味がある研究を選んで話を聞くことができ、とても勉強になった。今まで勉強することができなかった他の校種や他教科について幅広く学ぶことができた。またポスター発表ということでも発表者と会話をすることができた。気になったことを直接その都度質問することができた。今回ポスター発表を通して学ぶことが多かった。次回のポスター発表にもぜひ参加したいと思った。

### 基調講演



今回の基調講演は、福井大学教職大学院准教授の木村優先生にお越しいただき、「子どもの学習意欲を高める授業とは」というテーマで講演していただいた。その中で、子どもの学習意欲を高める授業をする際に考えなければならないものとして「教育方法が挙げられ、目的に合わせて道具を決めるといった意思決定が教師の専門性の本質である」ということ、そして最近よく出てくるキーワードの「アクティブ・ラーニング」や「ディラーニング」についてとても分かりやすく説明していただいた。また、協働学習を取り入れた授業を作るために「関係形成・編み直し」「理解深化」「思考節約」「参加意欲増加」「メタ認知促進」の5つを時々々の学習課題に即して戦略的に活用し、協働して授業をデザインすることで、子どもたちの学習意欲と学習の質を高めることができる。しかし、そのデザインが難しく挑戦的で奥深いと解説していただき、参加者にとってとても有意義な時間となったのではないだろうか。

准教授 瀬戸崎 典夫

今回の基調講演では、「学習意欲を高める授業」について、学術的背景も踏まえつつ、非常に分かりやすく講演していただいた。通常であれば、理解が難しい概念であっても参加者が自分の中に落とし込んで思考できるように、「仕掛け」が盛り込まれていたように感じた。大学院の学生たちはもちろんのことだが、教員としても多くの学びがあったと思う。特に、一方的な説明ではなく、フロアを巻き込むような対話型の講演であったことで、参加者が聞きながらアクティブな思考ができるような講演であり、大変参考になった。

教科授業実践コース 小八重 智史

本講演において、目的に応じて学習の形態を変えることについて示唆された。現在、推進されているアクティブラーニングは、ある条件を満たす授業ではなく、子どもが能動的に学ぶ授業を指すものである。そのため私たちが「何を、どのように学ばせたいのか」という問いを持ち続け、最適な学習形態を設定し続けることが必要となる。本講演は、そのための多様な学習形態を設定する力も教師として身につけるべき専門性にあたると思えさせられるものであった。

教科授業実践コース 中田 智大

基調講演を拝聴し、子どもたちの学習意欲を高める授業について改めて自分自身に問い直しながら、考えを深めていくことができた。特に「子どもの学習意欲を高めるための授業をデザインするために何が重要か」という問いでは、導入や生徒の実態把握などを考えていたが、「子どものつまずきはチャンス」という視点を木村先生が述べられた際、それがこの教職大学院での学びの本質があるのではないかと感じた。授業での子どもの手立て、発問、教材開発、生徒理解というような点を磨いていくことで、教師は実践力を身に付け、子どもたちは意欲の向上につながるのではないかと感じた。

子ども理解・特別支援教育実践コース 寺川 愛美

講演の最初に、木村先生から「子どもの学習意欲を高める授業とは？」と問われたときに、「子どもたちの興味をひくような導入を行うようにする」というのではないかと考えた。そのためには、集中できる環境を整え、子ども自身が「少し頑張れば到達できそう」と感じられるような目標を設定することが大切なのだとわかった。

### ワークショップ



発創デザイン研究室代表・福井大学非常勤講師である富永良史先生を講師にお招きし、「計画と即興の間へ意欲を高めるファシリテーション」をテーマとしたワークショップが行われた。直前の木村先生の基調講演においてのそれが印象に残ったワードであり、流れは本当に「即興」そのものであった。そのような即興の中にもファシリテーターは、ゴールを見据えた発問、各組での話し合いの内容の見極めなど効果的な手立てを講じなければならないことや、何よりも受講者を信頼し、何を言っても大丈夫という雰囲気、安心感を創出することが大切であるということも述べられた。学校教育における授業はまさに、教師と生徒の間での「即興」である。私たち大学院生は、このワークショップから学ぶことが本当に多かったのではないだろうか。今回のワークショップからそれぞれが学んだことを基に、これから実践を行う際には教師と生徒が互いに力を引き出し合う環境を創っていくべきだ。

准教授 楠山 研

おそろく綿密に計画されているのに無計画に見え、一方でおそろく計画していなかったことなのに、綿密に計算されていたかのように感じてしまう。そうした環境で私たちは、自然と話をしたいと思ひ、他人の話に耳を傾け、必死に考えてしまう。そんな不思議な時間、空間だった。そしてやはり重要なのは、先生が作ってくれたことや、何よりも受講者を信頼し、何を言っても大丈夫という雰囲気、安心感を創出することが大切であるということも述べられた。学校教育における授業はまさに、教師と生徒の間での「即興」である。私たち大学院生は、このワークショップから学ぶことが本当に多かったのではないだろうか。今回のワークショップからそれぞれが学んだことを基に、これから実践を行う際には教師と生徒が互いに力を引き出し合う環境を創っていくべきだ。

教科授業実践コース 平間 ゆかり

「学び合い」を生み出すためには、子どもたちが課題に対してどのように進んでいくかを示し、促していく「教師(ファシリテーター)」の役割は重要である。本ワークショップでは、参加者自身が富永先生の世界に自然と引き込まれる環境を、自分たちで活動して学んでいるという感覚を実感することができた。子どもたちが「安心できる場」を提供し、子どもたちが「問いや順序」を考へ、さらに、計画から離れ、今ここで起きたことを「即興的に組み替える」ことの重要性を示してくださった。改めて、これからの教師に求められる方だと感じた。

学級経営・授業実践開発コース 舛元 崇史

私は、子どもが主体的に発言をする授業を目指している。そのためには、教師が授業をファシリテートすることが求められる。ファシリテーターの役割は「学び合いが生まれる環境」を作り出すことである。そのためには、「安心できる場」「問い、順序」「即興の組み替え」が必要であることを学んだ。今回の富永先生のお話でファシリテーターの役割を、先生の実践を通して感じることが出来た。11月7日のSCS教室は「学び合いが生まれる環境」であったように思う。

学級経営・授業実践開発コース 林田 清美

ワークショップでは、語りやすい開かれた空間と興味をもつてくれる問いがあった。ファシリテーターのもと、グループで自由に話し合っ全体でも共有したが、楽しい雰囲気にもっともっと乗せられたため、満足感も残り、考えを深めたり話し合ったりすることが楽しかった。ファシリテーターを授業でも生かすことができれば、本当に児童生徒が主体となる学び合いの場になるのではないかと感じた。

子ども理解・特別支援教育実践コース 金原 亮介

今回のワークショップを通して感じたことは、「感覚を研ぎ澄まし、インスピレーションを鍛えること」の重要性である。授業では、教師が進行役(ファシリテーター)となつて子どもたちと一緒に場を構築していく。子どもたちの学習意欲を高めるためには、安心できる雰囲気づくり、考えを深める問いやその順序の準備、臨機応変な対応力が必要となり、これらの力はインスピレーションの鍛錬によって獲得できる。このことを、実践を通して学ぶことができたので、今後の自分の実践研究に活かしていきたいと思う。